

村芝居

魯迅

井上紅梅訳

青空文庫

わたしが支那しなの芝居を見たのは過去二十年間にたった二度だけであった。前の十年は絶対に見なかった。また見ようという意思も機会もなかったから、その二度はどちらも後の十年のうちで、しかもとうとう何の意味をも見出さずに出て来たのだ。

第一回は民みん国こく元年、わたしが初めて北京ペキンへ行った時、ある友達から「この芝居は一番いいから、以て世相を見てはどうかナ」と言われて、「芝居見物も面白かろう、まして北京ペキンだもの」と大おおに興じてすぐに何やら園とかいう処へ行ったら、もう世話物が始まっていて、小屋の外には太鼓の響が洩れていた。わたしどもは木戸口を入ると、赤いものなの、青いものなの、幾つも眼の前に

キラめいて、舞台の下にたくさんの頭を見たが、よく気をつけて見なおすと、まん中にまだ幾つかの空席があつたから、そこへ行って坐ろうとした時、わたしに向つて、何か言つた者があつた。最初はガンガンという銅鑼どらの音で、よく聞えなかつたが、注意して聞くと、「人が来るから、そこへ坐つてはいけない」というのだ。

わたしどもはぜひなく後ろへ引返して来ると、辮子べんつのぴかぴか光つた男が、わたしどもの側そばへ来て一つの場所を指さした。その場所は細長い腰掛で幅はわたしの上じょうたい腿たいの四分の三くらい狭く、高さは下腿かたいの三分の二よりも高い。まるで拷問の道具に好く似ているので、わたしは思わずぞつとして退しりぞいた。

二三歩あるくと、友達が、「君、どうしたんだえ」とわたしのあとから跟ついて来た。

「なぜ行くのだ。返辞へんじをしたまえな」

「いやどうも失敬、なんだかドンドンガンガンして、君のいうことはサツパリ聞えないよ」

あとで考えてみると、全く変なことで、この芝居はあまり好くなかったかもしれない。でなければわたしは舞台の下にじつとしていられない質たちなんだろう。

第二回はいつのことだか忘れたが、とにかく湖北水災義捐金こほくぎえんを

募集して譚叫天たんきやうてんがまだ生きている時分だ。その募集の方法は、

二元えんの切符を買って第一舞台で芝居見物をするので、そこに出る

役者は皆名人で、小^{しょうき}叫^{ようてん}天もその中にいた。

わたしが切符を一枚買ったのは本来、人の勧めに依った責め塞げであつたが、それでも誰か、叫天の芝居は見ておくものだ、といつたことがあつたらしく、前年のドンドンガンガンの災難も忘れてつい第一舞台へ行つて見る氣になつた。まあ半分は、高い^{あた}俵を出した大事の切符を使えば氣が済むのもあつた。

わたしは叫天の出る幕が遅いと聞いていたので、第一舞台は新式の劇場だから座席を争うようなことはあるまいと、わざと九時まで時を過してやつとこさと出て行つた。ところが、その日も相変らず人が一杯で、立っているのも六ツかしいくらい。わたしは仕方なしに後方の人^{ひと}込みに揉まれて舞台を見ると、ふけおやまが

歌を唱うたっていた。その女おんな形ながたは口の辺に火のついた紙捻こよりを二本刺し、側に一人の邏卒らそつが立っていた。わたしは散々考えた末、これは目蓮もくれんの母親らしいな、と想った。あとで一人の和尚が出たから気がついたので、さはいいながら、この役者が誰であるかを知らなかった。そこでわたしの左側に押されて小さくなっていた肥えた紳士に訊いてみると、彼はさげすむような目付でわたしを一目見て、「龔雲甫こううんほ」と答えた。わたしはひどく極きまりが悪くなつて顔がほてつて来た。

同時に頭の中で、もう決して人に訊くもんじやないと思つた。そこで子役を見ても、女形おやまを見ても立役たてやくを見ても、どういふ質たちの役者が何を唱っているのか知らずに、大勢が入り乱れたり、二

三人が打合ったり、そんなことを見ている間に九時から十時になった。十時から十一時半になった。十一時半から十二時になった。——そうして叫天はどうとう出て来なかった。

わたしは今まで何事に限らずこんなに我慢して待ったことはなかった。いわんやわたしの側にいた紳士はハ—ハ—息をはずませずて肥えた身体からだを持てあましていた、舞台の上のどんちゃん、どんちゃんはやしの囃はやしや、紅あかや緑のまぶしいキラめき。その時十二時だ。たちまちわたしはとてもこんな処にいられないと思つた。同時にわたしは機械的に身を捻ねじつて力任せに外の方へと押出した。後ろは一杯の人で通る路みちもなかつたが、大概その弾力性に富んだ肥えた紳士が、早くもわたしの抜け出したあとに、彼の右半身を突込ん

だので、わたしは自然に押され押されて木戸口に出てしまった。

街は観客の車以外にはほとんど一人も通行人がなかった。それでも木戸口には十何人か頭を昂^あげて芝居の番^{ばんづけ}附を見ていた。外に一かたまりの人が、何にも見ずに立っていた。わたしは何にも知らずに来たことを我れながら悔んだが、結局芝居の題目さえも忘れてしまった。

わたしが实际い芝居を見たのは、それよりずっと前の事だ。

その時おそらくまだ十一二にもならなかつたろう。わたしども魯^ろ鎮^{ちん}の習慣は、およそ誰でも嫁に入^いったむすめは、まだ当主にならないうちは、夏の間たいいは里方に行つて暮すのである。その時分わたしの祖母はまだ達者であつたが、母もいくらか家事の

手伝いをしていたので、夏も長く帰っていることは出来なかった。ぜひなく墓掃除をすましたあとで、二三日の暇を見て抜け出して行くのであった。わたしは母親に跟着いて外祖母の家に遊びに行つたことがある。そこは平橋村へいきょうそんと言つて、ある海岸から余り遠くもないごくごく偏僻へんぴな河添いの小村で、戸数がやつと三十くらいで、みな田を植えたり、魚を取つたりそういう暮しをしている間に、ただ雑貨屋が一軒あるだけであつたが、わたしに取つては極楽世界であつた。ここへ来れば優待されるのみか「秩秩斯チーチースーハ干幽幽南山」などというものを唸らなくともいいからである。

わたしと一緒に遊ぶいろいろの小さな友達が遠客が来たので、

彼等もまた父母の許しを得て、仕事を控えてわたしのお相手をした。小村の中の一家の客もほとんど大概芝居のハネたあとの女を見に行くことを考えていた。しかし叫天はそこにもヤツぱりいなかった……

さはさりながら夜の空気は非常に爽かさわやで、全く「人の心脾しんひに沁む」という言葉通りで、わたしが北京ペキンに来てからこの様ないい空気に遇ったのは、この芝居帰りの外ほかにはなかつたようにも覺えた。

この一夜ひとよはとりもなおさず、わたしが支那芝居に告別をした一夜で、もう一度そんなことに遇おうとも思わず、たまたま芝居小屋の前を過ぎて、わたしどもとはまるきり関係がなく、精神がすでに一つは天の南にあり、一つは地の北にあった。

けれどもその二三日前にわたしは思いがけなくある日本の本を読んだ。惜しいことには本の名前も著者の名前も忘れてしまったが、とにかく支那芝居に関することで、その中の一篇をかいつまんでいうと、支那芝居は無闇に叩き、無暗に叫び、無暗に踊り、観客の頭を昏こんらん乱させるから、劇場向きではないが、野広のびろいところで遠くの方から見ていると、自然に面白味がわかって来ると書いてあった。わたしはその時そう思った。これはいつもわたしの胸の中にあつてまだ言い出したことのない言葉だと。だからわたしはいい芝居は野外で見られるものと、すっかり覚えていた。北ペ京キンへ行つてからも芝居小屋に二度入つたが、ヤツぱりあの時の影響を受けたのかもしれない。何しろこれは公共のものではないか。

わたしどもは年頃もおつかつだったが順序から言えば一番下の弟だ。外ほかに幾人も目上の者がある。村じゅうは皆同姓で一家であった。そうはいうもののわたしどもは友達だ。喧嘩でもして年上の者を打つと一村の者は老人も若い者も、目上という言葉を想い出せない。彼等は百人中、九十九人は字を知らなかった。

わたしどもの日々の仕事は大概蚯蚓みみずを掘って、それを針金につけ、河添いに掛けて蝦えびを釣るのだ。蝦は水の世界の馬鹿者で遠慮会釈もなしに二つの鋏はりで鈎さきの尖を捧げて口の中に入れる。だから半日もたたぬうちに大きな井に一杯ほど取れる。その蝦はいつもわたしが食べることになるのだ。その次は皆と一緒に牛を飼うのだがこれは高等動物のせいかもしれない。黄おうぎゆう牛も水牛も空を

つかつてわたしを馬鹿にする。わたしは側へゆくことが出来ないで遠くの方で立っていると小さな友達にわたしが「秩秩斯干」が読めることなど頓著なしに寄つてたかつて嘸し立てる。

わたしがそこにおいて一番楽しみにしたのは、趙莊へ行つて芝居を見ることだ。趙莊は比較的大きな村で平橋村から五里離れていた。

平橋村は村が小さいので、自分で芝居を打つことが出来ないから、毎年趙莊にいくらかお金を出して一緒に芝居を打つのである。その時分わたしは、彼等が何のために毎年芝居を催すか、ということについて一向無頓著であつたが、今考えてみると、あれはたぶん春祭で里神楽（社戯）であつたのだ。

とにかくわたしの十一二歳のこの一年のその日はみるみるうちに到着した。ところがその年は本当に残念だった。早く船を頼んでおけばよかったのに、平橋村にはたった一つ大きな船があるだけで、それは朝出て晩に帰る交通機関で、決してよそ事には使えなかった。そのほか小船はあるにはあるが、使い途みちにならない。隣の村に人をやって訊いてみたが、もうみんな約束済であいてる船は一つもない。外祖母は大層腹を立て、なぜ早く注文しておかないのだ、と家うちの者を叱り飛ばした。母親は外祖母を撫なだめて、「わたしども魯鎮は、小さな村の割合に芝居を多く見ているのですよ。一遍ぐらいどうだつていいじゃありませんか」と押おし止とどめた、だが、わたしは泣きだしそうになった。母親は勢せい限かぎりわた

しをたしなめて、「決していやな顔をしちやいけませんよ。おばあさんが怒ると大変です」と言つて、それから誰たれとも一緒に行くゆことを許さなかつた。「おばあさんに心配させるものではありません」とまたあとで言つた。

それはそれでとにかくおさまつたが、午後になるとわたしの友達とは皆行つてしまつた。芝居はもう開あいているのだ。わたしは遠とおねはやし音おねはやしに囃はやしを聞いて、「今頃は友達が舞台の下で、豆乳を買つて食くてるな」と想つた。

その日は一日、釣りにも行ゆかず物もあまり食べないで母親を困こらせた。晩飯の時分には外祖母もとうとう気がついて、この子がすねるのも無理はないよ。あの人達はあんまり無作法だ。お客に

対する道を知らないといつて嘆息した。

飯を食つてしまうと、芝居を見に行つた子供達は皆歸つて来た、
そうして面白そうにきよようの芝居の話をした。ただわたしだけは
口もきかずに沈んでいると、彼等は皆嘆息して気の毒がった。

雙喜そうきという子供は中でも賢い方であつたが、たちまち何か想い
出して、「大船ならあれがあるぜ。八はちおじ叔の通い船ふねは、歸つて来
ているじゃないか」

十幾人のほかの子供はこの言葉に引かされて勇み立ち、あの船
で一緒に行こう、と皆立上つた。わたしはようやく元氣づいた。
けれど外祖母は子供だけじゃ安心が出来ないと言つた。母親も、
「誰たれか一人大人を附けてやりましょう」と言つたが、大人は昼

の仕事に勞つかれていたので、夜頼むわけにはゆかない。どうしようかと考えている中うちに、雙喜はまた何かいい事を想いついたよう
で大声上げて言った。

「わたしが引受けます。船は大きいし、迅じんちゃんはおとなしいし、
わたしどもは泳ぎがうまいし、こんなら大丈夫です」

まったくそうだ。この十幾人の子供は實際一人だつて、鴨の仲
間でない者はない。その上二三人は大潮を乗切つた者さえある。

外祖母も母親もようやく安心して今はもう何とも言わずにただ
笑っていた。わたしどもは一斉に立上つておめき叫んで門を出た。

わたしの重苦しい心は、急に軽く晴れやかになった。身体もの
びのびして大きくなつたように思われた。門を出ると月下の平へいき

橋ようには白い苦船とまぶねが繫もやつていた。みんなは船に跳び込んだ。雙喜は前の棹を引抜き、阿發あはつは後ろの棹を抜いた。年弱としよわの子供は皆わたしに附いて中の方に坐つた。年上の子供は船尾あつまに聚つていた。母親は送つて来て「氣をつけておいでよ」と言つた時には、もう船は出ていた。橋石にぶつかつて二三尺退しりぞいたが、すぐまた前に進んで橋を通り抜けた。そこで二艇ちようろの櫓をつけて、一艇に二人がかかつて一里行ゆくと交替した。笑う者もあつた、喋舌しゃべる者もあつた。その声は水を切つて行く音ゆと入り交つた。左右はみな青々とした豆麦の畑をとおす河中に、われわれは飛ぶが如く趙莊さして進んだ。

兩岸の豆麦と河底の水草から発散する薰かおりは、水氣の中に入りま

じつて面おもてを撲うつて吹きつけた。月の色はもうろうとしてこの水気の中に漂うっていた。薄黒いデコボコの連山は、さながら勇躍せる鉄けだものの背にも似て、あとへあとへと行くゆようにも見えた。それでもわたしは船ふな脚あしがのろくさくさえ思われた。彼等は四度手よたびを換えた時、ようやく趙莊がぼんやり見え出して、歌声もどうやら聞えて来た。幾つかの火は舞台の明りか、それともまた漁りの火か。

あの声はたぶん横笛だろう。宛えん転てん悠ゆう揚ようとしてわたしの心を押し沈め、我れを忘れていると、それは豆麦や藻草かおりの薰やきの夜気の中に、散りひろがってゆくようにも覺えた。

その火は近づいた。果して漁り火だった。わたしが今し方見た

のは趙莊ではなかつた。それは一ひとむれ叢の松林で、わたしは去年遊びに来て知っていたが、今も壊れた石馬せきばが河端かわばたにのめつて、一つの石羊せきようが草の中にうずくまっていた。この林を越すと、船はぐるりと廻つてまた港に入り、そこで初めて趙莊が見えた。

何よりも先さきに眼に入いつたのは村の端はすれの河添いの空地に突立つている一つの舞台だ。ぼんやりとした遠くの方の月夜の中で、空くうかん間の諸物がほとんどハッキリ分界していなかつた。わたしは画えの中の仙境がここへ出現したのかと思つた。この時船はいつそう早く走つて、まもなく舞台の人が見え、赤い物や青い物が動いて舞台の側の河の中に真まつくろ黒に見えるのは、見物人の船とまの苦とまだ。

「前の方に空間あきまがないから俺達は遠くの方で見よう」と阿發が言

った。

船はここまで来ると、ゆっくり漕ぎ出して、だんだん側に近づいてみると果たして空間あきまがなかった。みんなが棹をおろしたところは、舞台の正面からはずいぶん離れていた。正直に言うところ、わたしどもの白しろとま苦くろとまの船は黒くろとま苦くろとまの船の側へ行くのはいやなんだ。まして空間あきまがないのだから。

停船の間際に舞台の上を見ると黒い長※の男が、四つの旗はたを背に挿して、長槍をしごき、腕を剥き出した大勢の男と戦いの最中であつた。

「あれは名高い荒あらごとし事師だ。蜻蛉返りの四十八手が皆出来るんだよ。昼間幾度も出た」と雙喜は言った。

わたしどもは皆船頭みよしに立って戦争を見ていたが、その荒事師は決して蜻蛉返りをしなかった。ただ腕を剥き出した男が四五人、逆蜻蛉を打つと皆引込んでしまった。続いて一人の女形おやまが出てイーアーアーと唱った。雙喜はまた言った。

「夜は見物が少いから、荒事師は怠けているのだ。誰だってしんそこの腕前を無駄に見せるのはいやだからね」

全くそうだった。その時舞台の下にはあまり多くの人を見なかった。田舎者はあすの仕事があるから、夜になると我慢が出来ず皆ねむ睡りに行った。ちらばら立っているのはこの村と隣の村の閑人であった。黒い苦船の中に立っているのはいうまでもなく村の物持の家族であった。けれど彼等は芝居を見ているのではなかった。

大抵はそこでお菓子や果物や瓜などを食べていた。だから平たく言えば見物が無いと言つてもいいくらいで、雙喜が無駄だといったのも無理はない。

わたしは格別、逆蜻蛉を見たいとも思わなかった。わたしの見たいのは、役者が白い布きれをかぶつて一つの蛇のような蛇の精を両手に捧げているのと、もう一つは黄いろい著物きものを著きた虎のような虎が躍り出すことである。わたしはそれをいつまでも待つていたが遂に見ることが出来なかった。女形おやまが引込むと、今度は皺だらけの若旦那が出て来た。わたしはもう退屈して桂生けいせいに吩咐いいつけ豆乳を買いにやった。桂生はすぐ返つて来た。

「ありません。豆乳屋の聾っんぼは帰つてしまいました。昼間はあつた

んですがね、わたしは二杯食べました。仕方がない。お湯を一杯貰つて来て上げましょうか」

わたしはお湯も飲まずになお突立つて芝居を見ていた。それも何を見たとはツキリ言うことが出来ないが、役者の顔がだんだんへんてこ変へんてこ槓のものになつて、五官の働きがあるのだから、ないのだから、何もかも一緒くたになつて区別がつかなくなつた。小さな子供は勝手に自分の話をしていた。するとたちまち一人の赤い薄うすぎぬを著た道化役が舞台の柱に縛られて胡麻塩※の者から鞭で打たれた。みんなはようやく元氣づいて笑い出した。これはその一晩の中で、一番いい幕だつた。そうこうしているうちに、ふけおやまが出た。ふけおやまはわたしの大嫌いなもので、何よりも坐つて歌を唱

うのがいやだ。この時ほかの見物人も皆いやな顔をしていたから、あの人達の考えもわたしと同じであることを知った。そのおやまは初めしずしず歩いて唱っていたが、しまいにととう真中の椅子の上に坐った。わたしはうんざりした。雙喜や他の人達もぶつぶつ言いだした。わたしは我慢してしばらく見ているとその役者は手を挙げたので立つて行くのか、と思つたところが、いやはや、やっぱりもとの処で長々しく唱い続けた。船の中の者はみんな溜息を吐いたり欠伸あくびをしたり。雙喜は終ついに堪えかね、「こいつはあしたまで続きそうだぜ。もう帰ろうじゃないか」というと、みんなはすぐに賛成して、勇ましく立上がり、三四人は船尾へ行つて棹を抜き、幾いくじょう丈じょうか後すぎりして船を廻し、ふけおやまを罵り

ながら、松林に向つて進んだ。

月はまだ残つていた。見物した時間はあまり長くもないらしかった。趙荘を出ると月の光はいつそうあざやかになつた。ふりかえつて見ると舞台は燈火の中に漂ひょうびょう 渺びょうとして、一つの仙山かいやぐら楼閣を形成し、来がけにここから眺めたものと同様に赤い霞が覆いかぶさり、耳のあたりに吹き寄せる横笛は極めて悠長であつた。わたしはふけおやまがもう引込んだにちがいないとは思つたが、まさかもう一度見せてくれとも言えなかつた。

まもなく松林は後ろの方になつた。船あしは決して遅くもなかつたが、あたりは黒く濃く、夜更であることが知れた。彼等は芝居を罵り笑いながら船を漕いだ。すると舳しよくに突当る水の音が一ひとき

際^わあざやかに、船はさながら一つの^{たいはくぎよ}大白魚が一群の子供を背負うて浪の中に突入するように見えた。夜どおし魚を取っている爺^{れん}さん連は船を停めてこちらを眺めて思わず喝采した。

平橋までは一里もあるらしかった。漕ぎ手も皆つかれた。無暗に力を出した上になんにも食わないからだ。その時桂生はいいことに気がついた。羅漢^{らかんまめ}豆が今出盛りだぜ。火があるからちよつと失敬して煮て食おう。みんなは賛成した。すぐ船を岸へつけておかに上^{あが}った。田の中には真黒に光ったものがあつた。それは今実を結んだ羅漢豆であつた。

「あ、あ、阿發、この辺はお前の家^{うち}の地面だぜ。あの辺が六^{ろくいち}一^{いち}爺^{おやじ}の地処だ。俺達はそいつを取ってやろう」

真先におかへ上^{あが}つていた雙喜は言った。われわれは皆おかへ上^{あが}つた。阿發は跳ね上^{あが}つて

「ちよつと待つてくれ、乃公に見せてくれ」

彼は行つたり来たりしてさぐつてみたが、急に身を起して

「乃公の家の^{うち}がいいよ。大きいからね」

この声をきくと皆はすぐに阿發の家の^{うち}豆畑へ入つた。めいめい一抱えずつもぎ取つて船の中へ投げ込んだ。雙喜はあんまり多く取つて阿發のお袋に叱られるといけないと思つたので、皆を六一爺さんの畑の方へやつてまた一抱えずつ^{ぬす}偷ませた。

年上の子供はまたぶらぶら船を漕ぎ出した。他の者は船室の後ろで火を起した。年^{としよわ}弱の者はわたしと一緒に豆を剥いた。まも

なく豆は煮えた。みんなは船をやりつ放しにして真中に集まって、撮つまんで食った。食つてしまふとまた船を出した。道具を片附けて豆まめがら殻は皆河の中へ棄てた。何の痕跡も残さなかつたが、雙喜は八おじさん（船の持主）の塩と薪を使ったことを心配した。あのおやじはこまかいからね、きつと嗅ぎつけて怒鳴つて来るにちがない。

みんなそこでいろんな意見を吐いたが、結局、構おかうもんか、もしあいつが何とか言つたら、去年あいつが陸おかへ上あがつて櫛はぜの枯木を持つて行つたからそれを返せと言つてやるんだ。そうして眼の前で、八の禿頭を嚙してやるんだ。

「家うちへ帰れば大丈夫だよ。乃公が保証する」

と雙喜は船頭みよしに立って叫んだ。わたしはみよしの方を見ると、前はもう平橋であつた。橋の根元に人が一人立っていたがそれは母親であつた。雙喜はわたしの母親に向つて何か言つたが、わたしも前いちのま艙の方へ出た。船は平橋に来て停つた。われわれはごたごた陸おかへ上あがつた。母親は少し不機嫌で、十二時過ぎても帰らないからどうしたのかと思つたよ、とは言つたが、それでも元気よくみんなをよんで、炒いりごめ米を食わせた。みんなはもうおやつを食べているし、眠くはあるし、早く帰つて寝たかつたので、すぐに散り散りに別れた。

次の日、わたしは昼頃になつてようやく起きた。八おじさんの塩薪事件は何の問題も引起さなかつた。午後はやはり蝦釣りに行

つた。

「雙喜、てめえ達はきのう乃公の豆を偷んだろう。いけねえなあ、たくさん偷んだ上に、あんなに踏み荒しては」

わたしは首を挙げて見ると、六一爺さんは、小船に棹さして豆売からの帰りがけらしく、船の中にまだたくさんさんの豆が残っていた。

「ええ、わたしどもは御馳走になったよ。初めはお前のところの、要らなかつたんだが、ね、御覧、お前はわたしの蝦おどを嚇かして逃してしまつたよ」と雙喜は言つた。

「御馳走か——ちげえねえ」六一爺さんはわたしを見ながら權をとめて笑つた。

「迅ちゃん、きのうの芝居は面白かったかね」

わたしは頷いて「ええ」と答えた。

「豆はうまかったかね」

「ああ大変うまかったよ」

六一爺さんは非常に感激して、親指をおこして、得意になつて喋舌つた。

「さすがは大どころで育つた学者だけあつて、目が高い。乃公の豆は一粒撰よりなんだぜ。田舎者にやわからねえ。全く乃公の豆は、ほかのもんとは比べ物にならねえ。乃公はきよう幾らか、おばさんのところへ持つてつてやるんだ」

彼はそこで權を押し過ぎて去つた。

わたしは母親に喚よばれて晩飯を食いに帰ったら、卓上の大どんぶりに煮立ての羅漢豆があつた。これは六一爺さんがわたしの母とわたしに食べさせるために贈つてくれたもので、彼は母親に向つて、わたしのことを籠べらぼう棒にほめていたそうだ。

「年はいかないが見上げたもんだ。いまにきつと状じょうげん元あたに中るよ。おばさん、おめえ様の福分は乃公が保証しておく」

わたしは豆を食べたが、どうしてもゆうべの豆のような旨みは無かつた。

まったく、それからずっと今まで、わたしは本当にあの晩のようないい豆は二度と食べたことはなかつた。——あの晩のようないい芝居も二度と見たことはなかつた。

(一九三二年十月)

青空文庫情報

底本：「魯迅全集」改造社

1932（昭和7）年11月18日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「彼奴↓あいつ　或る↓ある　一層↓いつそう　況んや↓いわん
や　恐らく↓おそらく　凡そ↓およそ　屹度↓きつと　位↓くら
い　呉れ↓くれ　此奴↓こいつ　極々↓ごくごく　此処↓ここ
此の・此↓この　宛ら↓さながら　而も↓しかも　知れない↓し

れない 随分↓ずいぶん 其処↓そこ 其↓その 沢山↓たくさ
 ん 丈け↓だけ 只↓ただ 忽ち↓たちまち 多分↓たぶん 給
 え↓たまえ 為↓ため 一寸↓ちよつと て居↓てい て置↓て
 お て来↓てく て仕舞↓てしま て見↓てみ 迎も↓とても
 兎に角↓とにかく 取りも直さず↓とりもなおさず 尚お↓なお
 殆んど↓ほとんど 況して↓まして 又・亦↓また 未だ↓ま
 だ 丸切り↓まるきり 丸で↓まるで 見る見る↓みるみる 若
 し↓もし 矢ツ張り↓やツぱり 矢張り↓やはり 漸く↓ようや
 く」

※底本に収録された他の作品に、「燈」と「灯」の混在がみられ
 るので、この作品でも、「燈」はそのままにしました。

※底本は総ルビですが、一部を省きました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（山本貴之）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2004年8月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waazora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

村芝居

魯迅

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 井上紅梅訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>